
ホラ吹きの嘘

5 0 5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホラ吹き嘘

【Nコード】

N6540P

【作者名】

505

【あらすじ】

毎晩、奇妙な行動をする五助

その理由はいかに？

巻

五助は毎晩帰りが遅うてな

今日もほれ…こんな夜が更けてから帰って来た。

毎晩のようにどこかに出かけておるようだが

決まって行きは手ぶらなのに帰りは必ず、何かを手に持って帰ってくる。

ただの木の棒の時もあれば、どこで見つけたか大きな岩を

汗だくになりながら運んで来る時もあった。

村人も決まって色々と尋ねるが、五助は決して話さなかったので

怪しんで後をつける者もおったが必ず、途中で見失って帰ってくる。

今日も若い者が3人で後を追ったが、八賀の峠で見失ってしまい

引き返した所なんだが

皆そろって

- 煙のように消える

って言うものだから、化け物じゃないか？

なんて噂する者までいる始末だ。

でも、昼間は畑仕事に精を出して人一倍働き、親切で心の優しい若者だったから

この噂はいつの間にか消えた。

五助の奇妙な行動が半年ばかりも続いた頃
村の爺様が五助の家を訪ねて、聞いたそうなの

「のう五助や、誰にも言いつないなら言わんでいいが1つ、教えてくれんか？」

「そりやあ…なんだい？」と五助が聞き返す

「誰にも言えないのは、誰かに知られるとお前が損をするからかの？
それとも、誰かに話すと他の者に災いが行くからかの？」

五助は黙ってしばらく考えこんでおつたが、爺様の顔を見るなり言うた

「これを誰かに話すと、オラが損をするんじゃ…」

「ほう」

老人は暫く考えておつたが
また、五助に聞いた。

「それなら五助、誰にも話さんでええから紙に書いて教えてくれんかの？」

老人は満足して言ってみたもの

「爺様や、そんな、とんち、みたいな事言つてもダメだぞ。

これはな、本当に誰にも言えん事なんじゃ。例え神様でも言えん。

「ほう…神様でものう……」

我ながら上策だと思い言った事があっさりと否定されてしまった虚しさもあつたのだが
それ以上に、「神様でも言えない」という五助の意思が気になって仕方なかった。

もつと聞きたかったが、その日は家に帰る事にして五助に礼を言つと、家に戻った。

家に帰つてそつと戸を開けて外を見ているとな、やっぱり案の定夜遅くに人影がどこかに出て行ったのが見えたので知恵だして考えた

どうすれば分かるだろうか……

茶をすすり、消えかけた火鉢の明かりの中
一人、朝まで考えた

巻（後書き）

初心者なりにがんばって書いてみます

よろしくお願いします。

貳

そついえば妙な点が1つある

毎晩、色んな物を持って帰ってくるが家の中には何もなかった。

目の前に流れている大きな川もあるが
物を捨てるような音なんて聞いたことがない

つまり、家の中に持って入った物が全部消えていく
火に水をかけるよう一瞬で消えるのだ。

「こいつは…、いよいよ分からなくなつたな…」

とても考えても思いつく事でもなく
ただ、時間だけが過ぎ、遠くの山が薄つすら明るくなつてきたのが
分かった。

日が高くなつてから、五助の家を訪ねるとまだ寝ておつて
いくら呼んでも起きないもんだから爺様は勝手に家の中を探し始めた
布団の下、鍋の中、天井裏まで調べたが何も無い。

そのうち、爺様も腰が痛くなつてきたんで
座って休んでおつたらいつの間にか寝てしまった。

五助が入れ違いで目覚めると
自分の家で爺様が眠っているもんだからとても驚いた

「おい、爺様。何をしとるんや？」

爺様の肩に手をやって、揺すつてみたが一向に目覚めない。
あまりに動かないので死んでいるのかと思ったぐらいだったが
何とか生きているらしい。

さて、困ったのは五助

一向に起きない爺様を見て考えていたが
多分、夕方までは大丈夫だろう。と横にさせて布団を掛けて
畑仕事に出かけていった。

夕方になって家に戻る途中、隣の家の者が五助を呼び止めて

「おい、爺様はどこに行ったんじゃ？」と聞くもんだから

「家、ワシの家で寝とるわい」と返したのだが

「今、お前の家に行った所だが誰もおらんかったぞ」と逆に返された

家に急ぐと、爺様の姿はなかったが

布団も丸ごと無くなっていた。

慌てて爺様の家に行ってみたが、やはり居らず
村人総出で探したのだが、その日は結局、誰も見つけることが出来
なかった。

次の日、また次の日と過ぎて行き

ついに、3日が過ぎたが未だに爺様も行方は分からず

みんなもう死んでしまったと思い、本人がいないにも関わらず
葬式でも始めようとする始末

五助としても、自分の家に来たら消えた。なんて事になったら
自身の立場も悪くなると思って、ある日皆を集めて言った

「実はな、爺様は町に出かけている…。それでな、皆に土産を買
つて来るから

それまでは誰にも言わないでくれ。と頼まれていたんじゃ」

いちを何か言われた時のために、いろんな言い返しを用意していた
五助だが

人のいい村人は誰一人として疑わず

「そうだったのか、それなら早う帰って来てほしいのう」なんて
もう土産が待ちどうしくなったようだった。

さて、そうなるとう度は五助の状況がますますマズイ事になった

町までの距離を考えると、あと2・3日ぐらいしか騙せれない

さて、どうした物やら…

考えた挙句、とりあえず暫くはこのまま話を進めて行く事にして
その間に爺様の手がかりを一人で探す事にした。

ところがやっぱり、一人ではどうにもならなくなって
あつという間に三日目の朝が来てしまった。

子供らは村の入り口に朝から集まって
爺様の帰りを今か今かと待っていた

もう、ここまで来ると始末が悪い

どうにも出来なくなった五助は最後の手段を取る事にした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6540p/>

ホラ吹き嘘

2011年1月4日02時47分発行